

2025年がスタートしました。加茂谷地区では、毎年、阿波木偶「三番叟まわし」が来て福を分けてくれています。加茂谷中学校にも1月8日(水)に来てくれました。生徒も先生も頭をなでてもらい、ほっこりした幸せな時間を過ごすことができました。 ※裏面に「わたしの願い」の抜粋を掲載しています。

小学校の頃から毎年三番叟を見てきましたが、三番叟のことについて深く知ることができたのは、今年が初めてでした。このような行事を詳しく知り、また体験できることは、とても素晴らしいことだと思いました。毎年忙しい中来てくださる方に感謝し、家族などにも福を渡してあげたいと思いました。

今年も三番叟回しを見て新年を迎えることができました。私が小学生の頃から加茂谷へ出向いてくださり毎年のように見てきたので、おいべっさんの顔を見てほっこりしたのを感じました。人の差別の心で、今まで受けつがれてきた伝統を廃らしてしまうのは非常に残念だと思うので、こうやって続けていってくださる人がいるのはとてもありがたく思います。

三番叟回しを県外へ持って行って、約1000件もの家を訪ねているのは驚いた。「わたしの願い」を読んで、部落差別のせいで伝統文化がなくなるのは止めないといけないと思った。そのためにも同和教育を続けていかなければならないと感じた。



1・2年生は人権学習の時間にハンセン病についての学習を行いました。

ハンセン病に対して偏見をもち、入所者や社会復帰者、その家族を差別しているのはどんな人たちだと思いますか。「らい予防法」による国の誤った隔離政策が廃止され、20年経った今も、ハンセン病に対する偏見や差別が残っていると多くの入所者や社会復帰者が感じています。今の社会の中にも、ハンセン病に限らず、人種や年齢、障がいの有無や性別、家柄などによる偏見や差別があるように、私たちの心の中に自分とは違う一面を持つ人を差別する気持ちが入り込んでくる場合があります。そうした偏見や差別を解決していくためには、相手の人権を尊重する気持ちを持つことが大切です。 (「ハンセン病の向こう側」厚生労働省パンフレットから)

差別や偏見をなくすためには、シンプルですが差別や偏見について知ることだと思います。なぜなら、知らないで周りの人を差別してしまうこともあるけれど、知っていれば差別などをしなくてすむし、周りの人にも教えてあげることができるからです。

差別や偏見をなくすためには、まず自分たちが正しい知識を持ち、それを考えた上でなくしていったらいいのかなと思いました。道徳の授業をしっかりと聞いて学んでいきたいなと思いました。

ハンセン病についての正しい知識を得ること。そして忘れないように伝えていくこと。ひとり一人の意識を変えていくことから差別や偏見をなくしていくことができると思う。私も授業をする前はハンセン病なんて聞いたことしかなかったけれど、ハンセン病のことを知って差別や偏見に対しておかしいと思うことができたし、もっと知っていきたく感じた。

つなげ 三番叟まわしのころ ～門に立ち 言祝ぐ人々「福」招く～ 「わたしの願い」から

正月の祝福芸といえば、「太神楽(獅子舞)」「万歳」「春駒」が全国的に有名ですが、徳島県には「三番叟まわし」という祝福芸があります。「三番叟まわし」とは、二つの木箱に木偶を詰め込み、てんびん棒で担ぎ、一軒また一軒と家々をまわり、三番叟(三体)、えびす(一体)の木偶をあやつり演じるものです。

自然と豊かに共生していた時代に、一年の幸福をもたらせてくれる「三番叟まわし」は、人々にとってかけがえないものでした。そして、「五穀豊穡」「家庭内安全」「商売繁盛」を祈り、正月を迎える人々に、明るい展望と生きる勇気を運んできました。

「おめでとうございます!」と三番叟まわし芸人が元気よくあいさつをして玄関に入ると、すでに、ストーブを付けて部屋を暖め、「よう来てくれたなあ。まっとうたんでよ。三番叟さん、おいべっさんが来てくれなったら、うちんくの正月は明けんのよ。さあ、どうぞどうぞ。」と家族みんなで迎えます。三番叟まわし芸人が、木箱から木偶を取り出し舞わすたびに、家の人々は「ありがたい、ありがたい。」と手を合わせ、深々と頭を下げます。舞わし終わると、「お勉強ができるようになりますように。」と、おいべっさんがほほえみながら子どもたちの頭をなでます。そして、「福をどうぞ。」と、頭を深々とさげ両手を差し出す家の人々に福を授け、身体の具合が悪い人には、お腹や膝などをなでて「健康な生活が送れますように。」と祈ります。このように人々は、年に一度しかないこの日を心から待ちわびているのです。

明治の最盛期には、約二百人の芸人がいましたが、たった一人になってしまったときもありました。その人は新正月から旧正月にかけて、人々の幸せを祈って約八百軒もの家々を訪ね歩き続けています。

「寒さの一番厳しい季節、肌を刺すような冷たい風にさらされても、心待ちにしている人々の笑顔を思い浮かべるだけで、自然と足が前へ前へと動くのです。どんなに歩き疲れても、迎える人たちの温かい心に触れると、また、来年も福を届け続けたい、という気持ちがいっそう強くなるのです。」

近年から現代まで「三番叟まわし」が伝承されてきた背景には、長い年月をかけて、福を届ける人と迎える文化、それぞれが築いてきた信頼関係があったのです。

「三番叟まわし」が衰退した原因は、多くの伝統芸能と同じく、高度経済成長期以降の生活環境の変化だと説明されることもありますが、決してそれだけではありません。「三番叟まわし」を担ってきた人の多くは被差別部落の人々でした。同和問題についての学習が十分に取組みられていなかった時代には、被差別部落の仕事に対する偏見がありました。被差別部落の文化や個性のある仕事は差別の対象となりました。芸人たちは、「三番叟まわし」を続けることにより子や孫が差別を受けることを恐れて、木偶を押し入れの奥にしまい込み、あるいは川に流してしまうなどして廃業していきました。差別は徳島県の貴重な民俗文化財を奪ったのです。しかし、同和問題についての学習を深めるなかで、被差別部落の人々が築いてきた文化を消してしまわないよう、明るい展望と生きる勇気を運び続け、次世代へつないでいこう、差別をなくしていこうと取り組んでいる人たちがいます。

今、差別や戦争・環境破壊などによって、貴重な民族文化やたくさんの文化遺産が、世界中のあらゆるところで消えようとしています。そういう中で、「三番叟まわし」を正月に途切れさせることなく、祝福芸を受けついでいく取り組みや、それを大切に迎えているという素晴らしい文化が残っていることは、私たち郷土の誇りなのです。